

## Future Earth の視点から見た国際地学オリンピック International Earth Science Olympiad from the viewpoint of Future Earth

瀧上 豊<sup>1\*</sup>; 久田 健一郎<sup>2</sup>  
TAKIGAMI, Yutaka<sup>1\*</sup>; HISADA, Ken-ichiro<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 関東学園大学, <sup>2</sup> 筑波大学生命環境科学研究科

<sup>1</sup>Kanto Gakuen University, <sup>2</sup>Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

Future Earth —持続的な地球を考えると、大切なことは地球全体を知ることと国際的な協力であろう。地球全体を知る学問は地学（地球科学）であり、その国際的な competition である国際地学オリンピックは Future Earth とどのような結びつきがあるのだろうか？ 本講演はその視点から国際地学オリンピックを眺めてみる。

国際地学オリンピック (IESO) とは高校生のための国際科学オリンピックの1つで 2007 年第 1 回韓国大会から 2008 年フィリピン、2009 年台湾、2010 年インドネシア、2011 年イタリア、2012 年アルゼンチン、2013 年インドと毎年開催されている。参加国数もはじめの 6 カ国程度から 20 カ国以上になり、2016 年には日本の三重県で開催予定である。

この地学オリンピック事業のなかで Future Earth と大きく関連しているものをあげてみたい。

### 1) 国際協力野外調査 (ITFI)

国際地学オリンピックの他の科学オリンピックとの大きな違いはこの ITFI にあると思う。これは 1 カ国 4 名の参加高校生がバラバラになり、各国混合で 5 – 6 名のチームを作り野外調査を行い、その結果をまとめてプレゼンする企画である。個人のメダル対象の企画ではないが、その作業は各国の生徒同士が英語で相談しながら進めていく。内容は地学の内容だけでなく、地域の生活との結びつきに関連した事柄がテーマになることもある。若者にとって、このような国際共同作業は将来 Future Earth を考えていく上で、貴重な体験になると予想できる。

### 2) 参加国の増加

日本の地学みたいに地球科学の全分野を学習している国は少ない。しかし、参加国が増加していく傾向は、将来の地球全体にわたる環境問題などを考える上で、各国が地球科学の重要性を理解していることが 1 つの理由と考えられる。

### 3) 国際大会の問題

国際大会の問題は地質・固体地球、気象・海洋、天文・惑星の 3 分野に分かれているが、複合問題の出題が、現在、検討されている。このことも Future Earth を考えるうえで、重要なことと考えられる。なお、2016 年の日本大会では、Future Earth を意識した、複合問題を積極的に出したいと、個人的には考えている。

### 4) 日本の状況

地学が主要な大学理系受験科目でないために、地学オリンピックの受験者の約半分は文系であり、女子生徒も約 30% いる。また、国際大会参加 OB は地球科学だけでなく法学部や文学部、医学部へも進学している。このことは将来あらゆる分野の人が Future Earth を考える下地を持っていることになる。理想的にはすべての高校生が地学オリンピックを受験してくれるのが望ましいことであるが、日本の高校地学の履修率は他の 3 つの理科科目に比べて少ないのが残念である。

このように、地学（地球科学）を学び、地学オリンピックに参加することは、人間を含む地球全体を考えていくことが必要である地球の未来 (Future Earth) にとって、とても重要なことだと考える。

キーワード: 地学オリンピック

Keywords: Earth Science Olympiad